沢知恵さんのニューアルバム『花はどこへ行った』のデザイン

10月に発売された沢知恵さんのアルバムをデザインしました。ジャケットの写真は筒口直弘さんです。沢さんがコロナ下でうたった 11曲が収録されています。

Originally Desember 2023

オリジナリ

27

沢知恵さんニューアルバム『花はどこへ行った』のデザイン 1
沢知恵さんコンサートのデザイン 4
思い出のクリフォード 6
日日読書 6
メモランダム・本のデザイン 7
昭和残照 8
続・ぼくの映画館は家から5分 9
はれのち句もり 10
N'S COLUMN 11
魚の環世界 12
付録
トキドキ漫画
MY KID'S DIARY

愛は花、君はその種子

やさしさを　押し流す
愛　それは川
魂を　切り裂く
愛　それはナイフ
とめどない　渇きが
愛だと　いうけれど
愛は花　生命の花
きみは　その種子

挫けるのを　恐れて
躍らない　きみのこころ
醒めるのを　恐れて
チャンス逃す　きみの夢
奪われるのが　嫌さに
与えない　こころ
死ぬのを　恐れて
生きることが　出来ない

長い夜　ただひとり
遠い道　ただひとり
愛なんて　来やしない
そう　おもうときには
思いだしてごらん　冬
雪に　埋もれていても

種子は春　おひさまの
愛で　花ひらく

Amanda McBroom 詞・曲／高畑勲 日本語詞

THE ROSE
©1979 by WARNER-TAMERLANE PUBLISHING CORP.
All rights reserved. Used by permission.

その咲く花はどこへ行った
遠い昔の物語
その咲く花は少女の胸に
そっと優しく抱かれていた
野に咲く花はどこへ行った
遠い昔の物語
野に咲く花は少女の胸に
そっと優しく抱かれていた

Pete Seeger 詞・曲／忌野清志郎 日本語詞

花はどこへ行った

野に咲く花はどこへ行った
遠い昔の物語
野に咲く花は少女の胸に
そっと優しく抱かれていた

かわいい少女はどこへ行った
遠い昔の物語
かわいい少女は大人になって恋をして
ある若者に抱かれていた

その若者はどこへ行った
遠い昔の物語
その若者は兵隊にとられて
戦場の炎に抱かれてしまった

その若者はどうなった
その戦場でどうなった
その若者は死んでしまった
小さなお墓に埋められた

小さなお墓はどうなった
長い月日が流れた
お墓の周りに花が咲いて
そっと優しく抱かれていた

WHERE HAVE ALL THE FLOWERS GONE
Published by SANIGA MUSIC INC
All rights reserved. Used by permission.

Miyabi 詞／村松崇継 曲

いのちの歌

生きてゆくことの意味　問いかけるそのたびに
胸をよぎる　愛しい人々のあたたかさ
この星の片隅で　めぐり会えた奇跡は
どんな宝石よりも　たいせつな宝物
泣きたい日もある　絶望に嘆く日も
そんな時そばにいて　寄り添うあなたの影
二人で歌えば　懐かしくよみがえる
ふるさとの夕焼けの　優しいあのぬくもり
本当にだいじなものは　隠れて見えない
ささやかすぎる日々の中に　かけがえない喜びがある
いつかは誰でも　この星にさよならを
する時が来るけれど　命は継がれてゆく
生まれてきたこと　育ててもらえたこと
出会ったこと　笑ったこと
そのすべてにありがとう
この命にありがとう

何もかもちがうようで　よく似ている私たち
すれちがいぶつかりあい　不思議とひびき合うの

ねえ　このままでいよう
好きだなんて言わずに　ときをきざもう
ああ　こんな気持ち初めてだよ
終わらない夏みたい

やさしかったりつめたかったり　私は戸惑わない
正直すぎる生き方を　愛してしまったから

ねえ　このままでいよう
ずっとずっと言わずに　ときを待とう
ああ　こんな気持ち初めてだよ
夕焼けにキスをする

あなたが他の人を選んでも　私は　私は

求めすぎない恋は　おだやかな海のようね
さみしいとかかなしいとか　思わないくらい好き

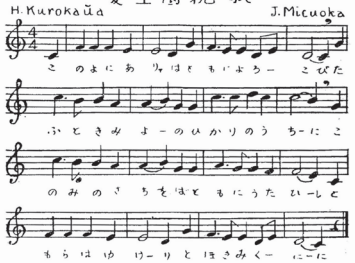
ねえ　このままでいよう
せめて次の夏まで　ときをきざもう
ああ　こんな気持ち初めてだよ
思い出よ　増えてゆけ
終わらない夏みたい

沢知恵 詞／曲

終わらない夏の恋

愛生園挽歌

H. Kurokawa　J. Micuoka



長島愛生園『愛生』1932年2月号より

此の世にありては　共によろこび
尊き御代の　光の内に
此の身の幸をば　共にうたひし
友等は逝けり　遠きみくにに

うき世の苦しみ　なげき悩みも
肉のほろびと　ともに失せて
みたま安けく　友ら憩へる
みくにしのべば　思ひはるけし

遠きみくにの　ありか知らねど
よき同胞の　姿見えねど
再びまみえむ　日をぞのぞみつ
我等がこころ　おどる嬉しさ

黒川眸 詞／光岡米造 曲

愛生園挽歌

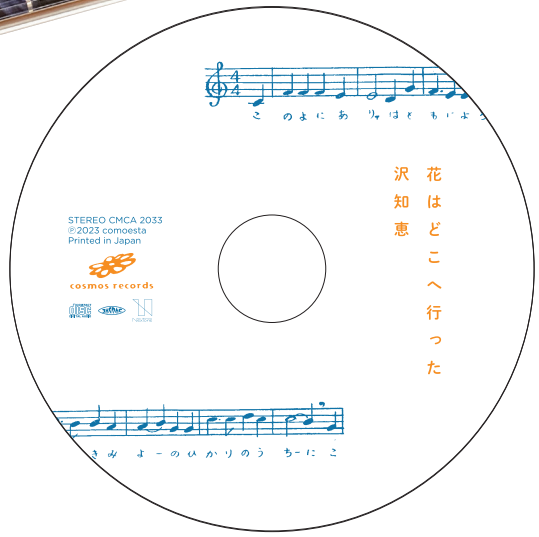
コモエスタ／コスモスレコーズ
〒700-8691 岡山中央郵便局 私書箱 104 号
info@comoesta.co.jp

Sawa Tomoe
Where Have All the Flowers Gone

ブックレット表4 ／キヨサクさんと（写真=加藤晋平）

ケース中／収容所跡の沢さん

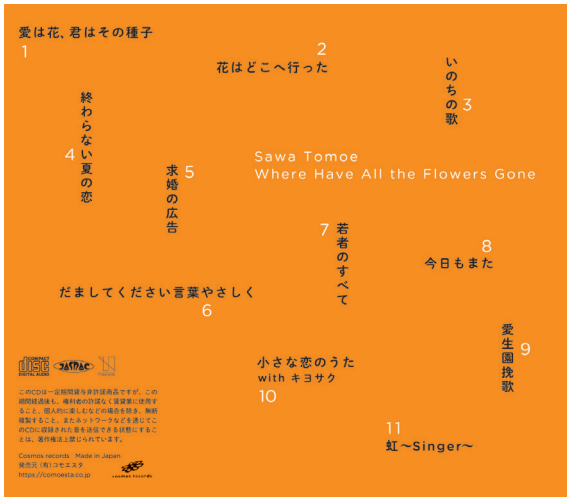
撮影場所はすべて岡山県にあるハンセン病療養所長島愛生園です。2023年5月撮影



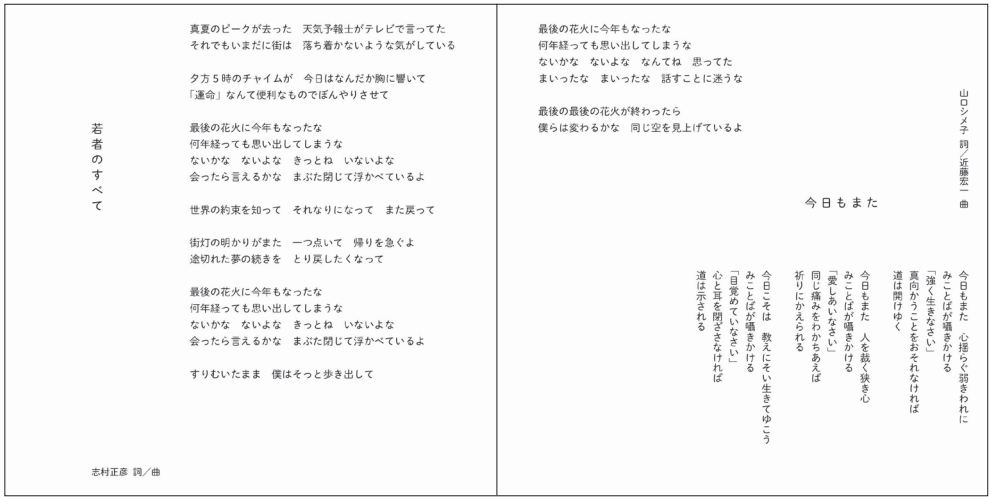
CDの盤面には、「愛生園挽歌」の楽譜を使いました。楽譜はブックレットにも載せています。

沢さんが毎年、岡山市で開催しているコンサート。チラシ、チケット、ポスターをデザインしました。

岡山での発売記念コンサートのデザイン



ジャケット裏面



若者のすべて

真夏のピークが去った　天気予報士がテレビで言ってた
それでもいまだに街は　落ち着かないような気がしている

夕方５時のチャイムが　今日はなんだか胸に響いて
「運命」なんて便利なものでぼんやりさせて

最後の花火に今年もなったな
何年経っても思い出してしまうな
ないかな　ないよな　きっとね　いないよな
会ったら言えるかな　まぶた閉じて浮かべているよ

世界の約束を知って　それなりになって　また戻って

街灯の明かりがまた　一つ点いて　帰りを急ぐよ
途切れた夢の続きを　とり戻したくなって

最後の花火に今年もなったな
何年経っても思い出してしまうな
ないかな　ないよな　きっとね　いないよな
会ったら言えるかな　まぶた閉じて浮かべているよ

すりむいたまま　僕はそっと歩き出して

志村正彦 詞／曲

今日もまた

最後の花火に今年もなったな
何年経っても思い出してしまうな
ないかな　ないよな　なんてね　思ってた
まいったな　まいったな　話すことに迷うな

最後の最後の花火が終わったら
僕らは変わるかな　同じ空を見上げているよ

山口シノメテ 詞／近藤宏一 曲

今日もまた　心揺らぐ弱きわれに
みことばが囁きかける
「強く生きなさい」
真向かうことをおそれなければ
道は開けゆく

今日もまた　人を裁く狭き心
みことばが囁きかける
「愛しあいなさい」
同じ痛みをわかちあえば
祈りにかえられる

今日こそは　教えにそい生きてゆこう
みことばが囁きかける
「目覚めていなさい」
心と耳を閉ざさなければ
道は示される

ブックレットは、単調にならないようにタテ組みとヨコ組を混在させて、曲名の位置にも変化をつけました。

4年ぶりのこのアルバムはコロナ下の記録です。人が密に集まり飛沫が飛ぶため、うたうという行為そのものが悪のように思われた中、うたっていいよといってくれた場所が2つありました。1999年から季節公演をしている東京下北沢のラ・カーニャと瀬戸内海のハンセン病療養所、長島愛生園です。救われました。11曲中10曲がラ・カーニャでのテイクで、3曲が長島愛生園に関連するうたです。キヨサクさんとデュエットした《小さな恋のうた》をのぞいて未収録曲です。アルバム・ジャケットの撮影は長島愛生園でしたいと思ったら、日下さんも同じことを考えていたとのこと。2022年の秋、日下さんとまり子さんが岡山にいらした際、長島にお連れしたのがロケハンだったわけです。全部がものづくりにつながる日下さん。1930年の開園時にあった収容所跡、福祉室を改装してできたカフェ、海辺……。筒口直弘さんが撮ってくださったいまの私は、いろんな表情に見えます。もはやブレないけれど、いつまでも揺れていたい。(沢知恵)

沢さんと日下のツーショット。収容所跡で

メモランダム・本のデザイン 19

『RAOUL DUFY L'ENCANTEUR』その2

日下潤一

図版を大きくしたいので、今回も説明をなるべく省くつもりでしたが、気がついたことを少し書きます。

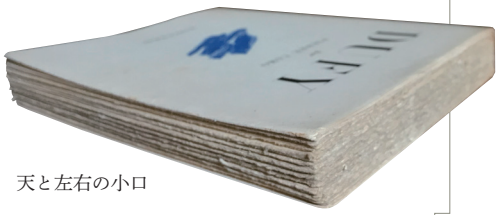
天と小口がアンカット。地は揃っていないが、切り口はまっすぐで裁断なく不揃い。天と小口は最初の持ち主がペーパーナイフで切ったのだろう。活版印刷が発明されて、ペーパーナイフは本を読むのに必需品だった。

巻末の目次の次々頁の印刷者の覚え書き（ACHEVE D'IMPRIMER）は、天が切られず残っている。アンカットの見本にしたいもの。印刷はLE QUINZE OCTOBRE MCMXLVII（1947年10月15日）。

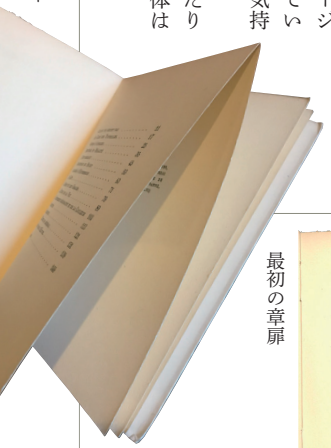
使用されている書体は、Bodoni とBauer Bodoni、Garamond。ノンブルの数字の形を見るとBauer とBdoniを元に作られた活字に見える。1はBauer に似ているし、9はいわゆるBodoni の形ではない。スイスで作られた本なのでこの印刷所が作ったか、スイスの活版所のアレンジしたオリジナル活字か。表紙と本扉に使われているイタリックの小文字（par／l'enchanteur）はGaramond。表紙の大きなDUFY はBauer Bodoni、ほかはBodoniだろう。各章の扉（裏は白）と本文のタイトルは同じで、扉は正体（せいたい）で本文の始まりはイタリック。版面の上に揃えている。

カバーなし、表紙に短い袖があって折り込まれている。本文は、地・版面中央の大きめのノンブルを含めて、天地のアキが均等。ノンブルは飛び出しているので地のマージンは広く見える。ノンブルと本文のアキは1行と行間分。ノンブルは大きいが、大きすぎず頁の中でアクセントになっている。本文頁全体に余白は広いが、ノド側より小口側が約5ミリ広い。一見真四角なページで繊細にレイアウトされている。真似したくなるほど気持ち良い。

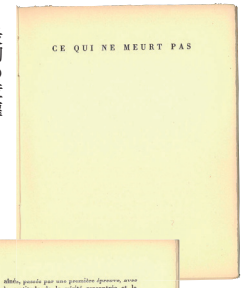
巻末の目次もよい。当たり前だが目次のノンブル書体は本文と同じ。



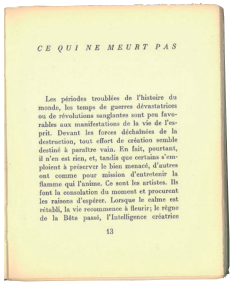
天と左右の小口



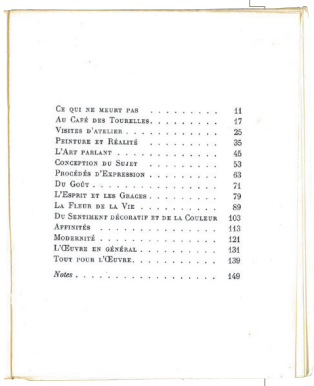
〈下〉天が切れていない目次と印刷クレジット



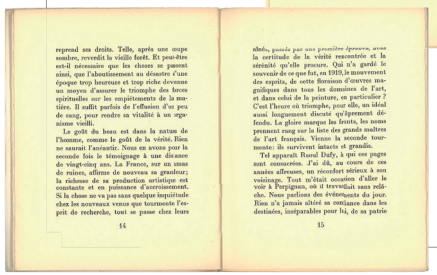
最初の章扉



本文



目次



本文

浅川マキ Asakawa Maki
1942-2010

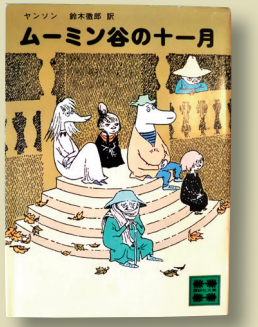
森英二郎
思い出のクリフォード⑪

浅川マキといえば黒の人である。40年以上前に友人が、浅川マキのコンサートをするのでポスターのデザインをしませんか、と誘ってくれた時僕は喜んで引き受けました。浅川マキのポスターはどれも黒っぽいものばかりだったので僕は思い切って白地をバックに出演者たちの写真でデザインしました。コンサートが終わってからその友人が、マキさんに、なんであんな白っぽいポスターなのよ！と怒られたと言っていた。それからしばらくして別の友達のミュージシャンから、あるギタリストが浅川マキのレコーディングのための合宿をしている時、部屋は昼間でもカーテンが引いてあって真っ暗やったで、という話を聞いた。なるほど浅川マキの黒への想いは半端やないんやなと思いました。

もり・えいじろう　1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本『おとうさんのうまれた うみべのまちへ』など。

日日読書
大西良貴 24

おおにし・よしたか　1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。



ヤンソン
『ムーミン谷の十一月』
講談社文庫／昭和55年

London Books
616-8366　京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

ムーミンは高校時代にハマッていたけど、古書店を始めて間もない頃に全部自店で売ってしまった。もう一度読みたいなと思って最近何冊か買いなおし、やっぱり好きな世界だな、と。ムーミン谷という架空の場所で、登場するのは人間ならざる妖精でも、描かれているのは小さな出来事が連なる日常で、我々の生活に通ずるものがある。

最終巻『ムーミン谷の十一月』は、とりわけひそやかで地味な印象。ムーミン一家が不在のまま、ヘムレン、フィリフヨンカなど本来脇のキャラクターたちだけで物語が進む。心和ませてくれるはずのムーミン一家がいないために、彼らの間は度々ぎくしゃくする。彼らの心の屈託、欠点も描かれ、妙にネガティブな要素の多い作品だが、それぞれの立場からムーミン一家に思いを馳せる様子は、二十数年に渡って書き継いで来た世界を、著者ヤンソンが改めてとらえ返しているようだ。

「火星土地分譲予約受付証」

関川夏央 昭和残照 十九

二〇一三年 七月に九十二歳で亡くなったSF作家・競馬評論家の石川喬司（たかし）の遺品に「火星土地分譲予約受付証」があったそうだ（読売新聞二〇一三年十月二十六日、夕刊）。秘蔵されていたのではなく、物の間にはさまっていたのを息子さんが見つけた。六十五歳の息子さんは小学生の頃、父親から自慢げに見せられた記憶があるという。

「火星土地分譲予約受付証」は「日本宇宙旅行協会」発行、冒頭の「貴殿は火星に拾万坪の土地を持っている」という一文のあとに、こうあった。

「来るべき将来、本協会にて計画中の火星の開発事業に成功したる暁は、貴殿の予約申し込みを優先的に尊重し、事業地内の拾万坪の土地を分譲することの証しとして、この書を交付します」

「権利書」と火星の「開発予定地地図」が添えられ、「火星人たる心構え」として、「科学尊重、芸術愛好、寛大、無欲、友愛、男女を超越、平和を愛する事」と記されていた。

日本宇宙旅行協会は一九五三年（昭和二十八）に設立され、五六年から五七年まで「分譲予約証」を申込金千円で発行し、江戸川乱歩、早川雪州、徳川夢声ら有名人も申し込んだ。三島由紀夫もおそらくその一人だった。

石川喬司は五六年には東大から毎日新聞に入社して四年目、二十六歳の「サンデー毎日」記者だった。彼はその頃からSF評論に手を染め、やがて自分もSF小説を書いて、六三年、星新一、小松左京、福島正実らと「日本SF作家クラブ」を設立した。毎日を退社して作家生活に入ったのは七一年である。

一九五〇年代の宇宙ブームで、酒席の冗談から始まった「日本宇宙旅行協会」の会長・原田三夫は、五六年には六十六歳である。東大理科を出て府立一中（のち日比谷高校）の先生をしていた原田三夫は三十歳を目前に編集者に転身、二四年（大正十三）「子供の科学」を創刊した。天体望遠鏡、真空管ラジオ、ピンホール・カメラなどの設計図が織り込まれた雑誌は理科好きの子どもたちの人気を博した。「分譲予約受付証」などが明らかにプロの手際だったのは、原田三夫の仕事だったからである。

「火星の拾万坪」がオトナの遊びだと承知の上で五千人も申し込んだのだから、よい時代だった。五六年の大みそかには、日比谷の日活国際会館屋上に天体望遠鏡二十台を据えて「火星地主大会」を催し、盛会だった。興味を持ったら何ごとにも打ち込む癖のある三島由紀夫は「火星地主大会」には不参だったが、翌五七年六月九日、やはり日活国際会館屋上での「空飛ぶ円盤」観測会には参加した。その夜、UFOは現れなかったが、五年後、六二年に書いた『美しい星』には純文学で初めて空飛ぶ円盤が出現した。

原田三夫は七七年、八十七歳で没したが、「子供の科学」は健在で、二〇二四年十月に創刊百年を迎える。

遠い昔、評論家の呉智英が、「オレは火星の土地権利書を持っているから老後の心配はない」と自慢していたが、その写真版を初めて新聞紙上で見て感慨を持った。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』（双葉社／第7回講談社ノンフィクション賞）『「坊っちゃん」の時代』（双葉社／谷ロジローと共作・第2回手塚治虫文化賞）、近著に『人間晩年図鑑』シリーズ（岩波書店）。

イラストレーション……南伸坊

続 ぼくの映画館は家から5分 26

伊野孝行

ぼくらの知ってるアイドルも将来朝ドラになるかもね、と友達と話していると「いや、山口百恵は子ども時代が暗すぎるし、芸能活動は一瞬だから朝ドラ向きじゃないよ」と彼は言った。彼女の自叙伝『蒼い時』を読んだ（なんとまだ絶版になってない）。百恵の父親には別の家庭があり、戸籍には「認知」の文字。

『アダプション』の主人公43歳の未亡人カタは妻子ある男と不倫している。カタは子どもが欲しい。（おお、まるで『蒼い時』じゃん。しかし男は子どもを拒絶したので山口百恵は生まれない）そんなカタ達のやりとりを見ていたアンナ。アンナは寄宿舎の生徒で、親からは捨てられたも同然。アンナはカタに何かを感じ取ったのだろう、恋人との逢引場所にカタの部屋を貸して欲しいと頼む。やがて、孤独が背中に張り付いた二人の間にだけ生まれる友情。

アンナが結婚できるように学校や親を訪ねて話をつけるカタ。アンナの親はかなりのクソだったし、結婚パーティーの最中アンナと喧嘩して出ていく新夫には不安しかない。カタの力添えも虚しく、不幸が不幸を重ね着してしまうのか……。カタは養子縁組で乳児を迎えることを選んだ。ここには幸あれと願わずにおれない。

共産圏時代のハンガリー映画。監督は今年92歳。彼女自身も幼い時に両親を亡くし、養女として育てられた。

いの・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『画家の肖像』『となりの一休さん』などがある。テレビアニメに「オトナの一休さん」。最新刊は南伸坊さんとの対談本『いい絵だな』。

新聞を載せて人居ぬ炬燵哉　篠崎霞山

連載の第一回で、尾崎紅葉の〈江戸川や浮木に涼むはだか虫〉という句を取り上げた。そこで記したのは、句の解釈の揺れについてであった。当初は、褌一丁になって舟の上で休憩する船頭の姿を詠んだものと考えたが、やがてその解釈に自信がなくなり、「浮木」は涼み船を、「はだか虫」はそれに乗る遊客をさすのではないかと読みを改めた――そんな経緯を述べたのである。浮世絵から明治期の古写真まで、図像資料を多少はあさったものの、おあつらえ向きの褌姿の船頭に巡り合うことができなかったため解釈を変えたのだが、このたびついに、「はだか虫」はやはり船頭でよいという確信を得た。篠崎霞山の家集『霞山集』に、

裸身や船頭すゞむかゝり船

とあるのを見つけたのである。

霞山は紅葉の俳句の弟子の一人。『俳諧新潮』の収録句数は九十二句で、編者紅葉、星野麦人に次ぐ三番手につけている。麦人が家集の後記で述べるように〈都会人事の句が大半を占め〉る作品の方向性が、紅葉のそれと一致していたことが厚遇の理由だったに違いない。もっとも詠みぶりにおいて両者がずいぶん異なることは、情景としてはほぼ同じとみなせる右の二句を比べれば一目瞭然。外連味の強い紅葉に対し、霞山はいかにも平淡だが、平淡必ずしも平板を意味しない例として、たとえば「新聞を」の句がある。

新聞が炬燵の上に開かれたままになっている。それを読んでいたはずの人物の姿はどこにも見えない――一読してそんなイメージが浮かぶが、郵便受けから取り出してきた新聞がそのままぽんと置かれているとしても、不都合はなさそうである。しかし、どうもそうではなかろうと思うのは、「置いて」ではなく「載せて」としたことの効果に他なるまい。その上での「人居ぬ」が、新聞を読みかけていた気配だけを残して人が消えてしまったことに虚を突かれたようになっている語り手の気分を、巧まずして語っている。

時は弥生大河に橋をかけんとす
いつ覚むるとも知らぬ息子の昼寝哉
花瓦斯に光る金庫や夷講
城門の闇にきらめく氷柱哉
遣羽子や広う構へし男たち

『霞山集』から各季の句を一つずつ挙げた。同書は霞山の十七回忌の年にあたる昭和七年（一九三二）の刊行で、千四百句弱を収める。千葉県出身の霞山は、十一歳で木場に出て、終生、同所で業を営んだ。大正五年（一九一六）に享年五十五で没。つまり文久二年（一八六二）の生まれになるから、紅葉よりも五歳の年長である。〈商家に長人なつたせゐもあらう非常に丁寧な、謙遜な人で、丈は高く〉云々とは、これも後記にある麦人の言（長人はオトナ、その下に「に」の脱字？）。都会人事という主題においてこそ紅葉に近かったが、句の情趣はむしろ紅葉が嫌った蕪村の季題趣味に学ぶところが大きかったと想像される。

はれのち句もり 十八

たかやま・れおな　1968年、茨城県生まれ。俳人。「豈」「翻車魚」同人、朝日俳壇選者。佐藤りえさんの個人誌「九重」に、六百番歌合の題による恋50句を発表。百題稽古シリーズ300句をコンプリートしてひと息ついた。

イラストレーション……霜田あゆ美

N'S COLUMN

西岡琢也
カクハタ、犬橇と格闘す

一時〈泣けます！〉と言う映画の宣伝惹句が流行った。〈待望の映画化〉もよくある。いつも「誰が待ち望んでるの？」と言いたくなる。関係者以外、誰も待ってないよ。

以前本欄で取り上げた角幡唯介「裸の大地」シリーズの第二部が出た。題して『犬橇事始』。声を大にして言いたい、こう言う時に〈待望〉を使うんだぞ！　僕は激しく待ち望んでいた。前作を上回る快著だ。

前著でカクハタは、犬一頭連れて人力橇でグリーンランドの極北の大地＝〈裸の大地〉を旅した。だが彼がかねてより標榜していたのは、一般的などこかへ到達する冒険・探検（計画到達主義）でなく、イヌイット（グリーンランドやカナダに住む極北先住民）のように犬橇を走らせ狩猟者目線で大地を自由に動き回る事だった。それで今回、人力橇の比ではない出費を覚悟で犬橇の旅を選択したのだ。

前半の犬集め、橇や鞭（犬に指示を与える）や犬の胴バンド作りのプロセスは、未知の事ばかりで興味深い。勿論全て手作りだ。拠点の村、シオラパルクのイヌイットたちが、人力橇の時と違いあれやこれや口出し手伝ってくれる。イヌイットたちは犬橇を始めたカクハタが、やっと自分たちの伝統的な生活を是としたと思ったのである。

一年目十頭、二年目に二頭を加え十二頭。犬たちとカクハタとの凄絶な戦いが詳述される。

巻頭に十二頭の犬のカラー写真が載っている。カクハタがまるで言う事を聞かない犬たちに暴力的な訓練を繰り返す度に、巻頭写真の犬を眺める事になる。後にカクハタは犬橇の面白さは、犬との物語（犬の個性や飼い主との歴史）にあると書く。カクハタが怒鳴り犬が吠え、噛む。犬をあの手この手で橇引きに仕立てるまでの格闘に圧倒される。

試走を何度も繰り返し、道中で調達する食糧の海豹狩り（ウーット狩り）に出かける。全身白ずくめ、白い衝立で身を隠しながら百メートルの距離まで近づくが、警戒心の強い海豹は側の氷の穴にスルリと逃げてしまう。失敗を繰り返すうち、海豹の生態や出没傾向に詳しくなる。すると大地との結びつきを強く感じるようになる。

犬橇二年目、雌犬が加わる。雄十一頭に雌一頭。メリットとデメリットがある。雄はやたら張り切る。しかし雌の発情期になると…分かるでしょ？　人間と同じですよ。

「エスキモー」には、イヌイットの中のイヌイットと言う意味があるとカクハタは言う。エスキモーは帰りの食糧を気にせず旅をする。しかし生還を担保にしておきたいカクハタは、その域に達せていない。信じれば大地は報いてくれる＝必ず獲物が取れる。理屈では分かるが。それに老いもある。もう二度とこんな旅は出来ないかもしれないとの思いもよぎる。旅のスケールは、肉体の若さと強さに比例すると知っているから。

終盤、新型コロナ禍が襲う。グリーンランドにも感染者が出る。エルズミア島の入域許可をカナダ政府に取り消される。予定コースの変更を余儀なくされるが、カクハタは十二頭の犬と共に五十四日間、千二百余キロメートルの大漂泊行を達成した。

最後は悲痛だ。一旦帰国しグリーンランドに再入国したカクハタを待っていたのは、貴重な二頭の先導犬（犬橇の先頭を走る）の病死だった。さらに老犬一頭を自ら殺す事になる。犬と共生してきたイヌイットにその処分は当たり前の日常だが、カクハタには重すぎる。鋭利なナイフを突きつけられたような幕切れだった。

この後カクハタは？　犬たちは？　今から続刊が待たれる。

にしおか・たくや　1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO〈刺青〉あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ～遥かなる帰還』、TVドラマ「京都迷宮案内」シリーズ、「返還交渉人」など。

Zone（ゾーン）と呼ばれる不可思議な地域を描いたロシアのストルガツキー兄弟によるSF小説『ストーカー（原題『路傍のピクニック）』（1983年発行／早川書房）。アンドレイ・タルコフスキー監督による同名の映画は1979年に公開されました（日本公開は1981年）。

何かの「来訪」でできたとされるゾーンは、本来立ち入り禁止の場所ですが、ストーカーと呼ばれる密猟者や作家、物理学者を大いに惹きつけ、彼らはそこに足を踏み入れます。周囲の風景も自然も刻一刻と変化するゾーンでは、同じコースをたどっては決して戻って来られません。まさに摩訶不思議としか言いようのない場所とそれをめぐる人々の心情とやりとりが描かれています。

この本を読むたび私はスウェーデンの様々な自然の風景を思い起こします。誰もが出入り自由なNaturreservat（自然保護区）はどこも訪れるたびに異なり、人々を魅了し続ける場所。そこで時おり持ち帰る木の枝や小石などは、私にとってのゾーンで手に入れた戦利品です。

今年10月下旬、南スウェーデンの沖合で三度にわたってフェリーが座礁しました。漏れ出た大量の燃料が自然保護区のある沿岸に広がり、白鳥などの野生動物にも被害がおよんでいます。偶然にもその場所は、最近（9月中旬から10月上旬）の買い付け旅の最後に訪れたばかりでした。水中に沈み込んだ重油が多く、今は立入禁止区域に。生態系への今後の影響も懸念され、心配でなりません。

これまで26回にわたって「魚の環世界 A to Z編」をお届けしました。

〈上〉Spraglehall Naturreservat（10月5日）
〈下〉早川書房・1983年

魚の環世界 26

魚住寧子

タイトルレタリング……ヨコカク（岡澤慶秀）

うおずみ・やすこ
1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

ウンベルト　Umwelt Textiles & Objects
604-0962　京都市中京区夷川通御幸町西入達磨町588-1

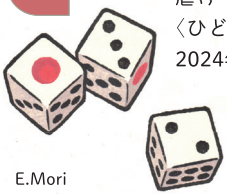
今月のあとがき

翻訳家の斎藤真理子と翻訳家で詩人のくぼたのぞみの往復書簡集『曇る眼鏡を拭きながら』。子供時代、翻訳を仕事にするまでのこと、藤本和子との出会いと思い出、子育て期の苦悩、いま起きている戦争のこと、話題はパッチワークのように繋がれ、膨らんでいく。ふたりの言葉と文学に対する真摯な姿勢。読後、読みたい本が一気に増えた。アキ・カウリスマキの『枯れ葉』。

虐げられてきた人々の静かな怒り、〈ひどい戦争〉に対する強烈な怒り。2024年、なによりも平和を。（赤波江）

NHKのテレビ番組「探検ファクトリー」。中川家とすっちーの三人が工場を見学する。大体は中小企業。先日は、大阪の堺にあるスコップとシャベル専門のトップメーカー。スコップのデザインは柄と先だけでシンプルだが、150種類もある。用途によって少しずつ形が変わる。電柱のための穴を掘るとても柄の長いもの、機関車の石炭用はマニアが買う。ポールや杭のを掘るのは二股だ。モダンデザインの入る余地を許さない形が面白い。西日本（大型はシャベル、小型はスコップ）と東・北日本では名称が逆になる。（日下）

オリジナリ
Originally December 2023
27



E.Mori

2023年12月15日発行　〈ロゴデザイン〉ヨコカク　〈編集・デザイン〉赤波江春奈＋日下潤一　〈印刷・製本〉グラフィック
〈発行〉ビーグラフィックス
©B GRAPHIX 2023, Printed in Japan　【無断転載禁止】

◆Web＝bgraphix.com　◆Twitter & Instagram＝@bgx_book_design　◆日下潤一のブログ＝www.bgx.jp/blog/
「オリジナリ」はBGXが毎月発行するフリーペーパーです／90部／お問い合せは akabae@bgx.jp まで

地球上のすべての戦争を止めてくれて戦争で苦しんでいるすべての人たちを助けてくれる龍を飼うという野望

トキドキ漫画 ❶ 丹下京子

たんげ・きょうこ 名古屋生まれ。愛知県立芸術大学デザイン科卒業。TIS会員。2012年講談社出版文化さしえ賞。新聞、書籍、雑誌、パッケージ、広告、webなど幅広く活動中。

My Kid's Diary

3 元気があれば

あれ？　寝てるの？　さっきまで陽気に遊んでいた息子が、カーペットの上にうつぶせになって、すぅすぅ寝ている。この〈突然寝る現象〉は、息子が体調を崩す予兆。数時間後、熱を測ると38・5度。「あちゃ～」と漫画みたいなことを声に出して言ってみる。ちょっとだけ衝撃がマシになる。現実はなんにも変わらないのだけど。

頭のなかにサッとスケジュール表を広げ、3秒で一週間の予定を組み直す。「なんとかなる、大丈夫、なんとかするよ」と、自分で自分にはげましの声をかけてあげる。深呼吸をして、スマホで小児科の予約をとる。

なぜか、仕事がとても忙しい時期や、楽しみな予定がパンパンにつまっている時期にかぎって体調を崩す我が子、というのは〈子育てあるある〉。つい先日も、仕事の打ち合わせの時にそんな話で盛り上がった。どこの家も同じで、少しほっとする。

熱は下がって元気なのに、風邪症状があるので保育園には行けない、という数日間が一番大変。熱があるのになぜかめちゃくちゃ元気、というのも厄介。

元気な子どもに「もう少し寝てなさい」なんて通じるわけもなく、こちらはこちらで、ズルズル遅れつつある仕事を巻き返したい。いろんな気持ちで胸がつぶれそう。わたしの仕事机はリビングにあるので、息子の相手をしながら、仕事をする。

「お母さん、これ見て」「お母さん、ちゃんと見て」「お母さん、こっち来て」「お母さん、牛乳のみたい」「お母さん、おやつは？」「お母さん、なんか退屈」「お母さんお母さん」「お母さん！」「お母さ～ん！」一日に何回「お母さん」って呼ばれるかカウントしてみたい。体感としては300回くらい。

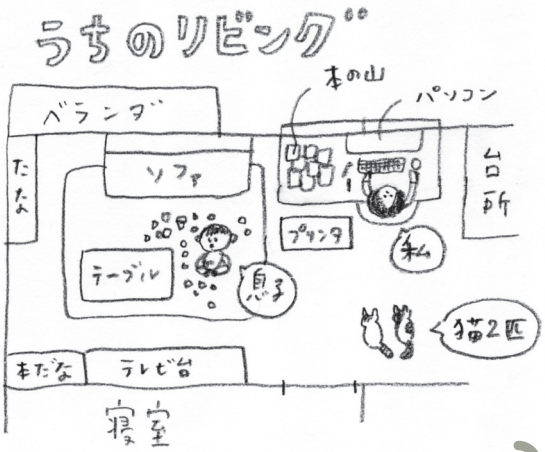
「ごめん、今ちょっと無理」「ごめん、もうちょっと待って」「ごめん、あと5分だけ仕事させて」「ごめん、自分で牛乳ついで」「ごめん、台所にバナナあるから勝手に食べて」「ごめん、お母さん、いま、超忙しい」「ごめん」「ごめんねごめんね」「本当にごめん」

あぁ、「ごめん」ばっかり言う親にはなりたくなかったなぁ、あんまり仕事進まなかったなぁ、眠る息子の髪を撫でながら一日を反省する。冷たい布団の中で、明日の仕事の段取りを考え始めそうになるが、頭の外に強引に追いやって、目を瞑る。悩む時間より、眠る時間が優先だ。

なにやらレゴで大作に励んでいる息子。何かとたずねると、パソコン、マウス、キーボードの3点セット。「見ててよ、仕事中のお母さんの真似」と言って、眉間に深い皺をよせ、暗い目をし、レゴで出来たカラフルなキーボードをぱちぱち打ち、マウスをカチカチ動かしている。「え！　お母さんってそんな顔してる？」と言うと、フフフと得意げに笑っている。笑えないが笑ってしまう。

この子は将来、どんな顔で仕事をする大人になるだろうか。「仕事中のお母さんの真似」は動画に収めた。大人になった君に見せてあげよう。

完全復活した息子と、無事に仕事の〆切に間に合った私、手をつないで公園に行く。誰もいない冬の公園で、ゾンビになりきってオロオロ走り回る〈ゾンビごっこ〉。ただ走っているだけで楽しい。ゲラゲラ笑いながら、日が暮れるまで遊んだ。白い息と、枯葉を踏む音。あぁ、元気があるってすばらしい。



あかばえ・はるな　1985年、長崎県生まれ。愛知県立芸術大学卒業。2010年にビーグラフィックス入社。2017年9月出産。この号を作っている最中に胃腸炎になって寝込みました。息子がお腹をさすってくれました。

赤波江春奈